

第54回日本PTA関東ブロック研究大会山梨大会に参加して

富士市PTA連絡協議会

副会長 橋本 仁

【第54回日本PTA関東ブロック研究大会山梨大会】に、参加させていただきました。
下記にご報告をします。

1. 概要

1) 分科会

実施日時：令和4年10月15日（土）12時45分～18時

参加分科会：第4分科会（キーワード；安全安心「知」）

研究テーマ：自然災害に対する安全について考えよう～富士山の火山災害から子どもを守るPTA活動～

会場：富士吉田市市民会館 富士山ホール（富士吉田市）

2) 全体会

実施日時：令和4年10月16日（日）9時20分～13時00分

会場：河口湖ステラシアター（富士河口湖町）

2. 補足

1) 分科会

－1次第：①オープニングアトラクション→②開会セレモニー→③講演→④研究発表1～4→

⑤閉会セレモニー→⑥クロージングアトラクション

－2オープニングアトラクション：富士学苑高校ジャズバンド部

－3講演（演題）：富士山の噴火に備えて～過去から学ぶもの～

講師：吉本 充宏（よしもとみつひろ）氏 富士山科学研究所富士山火山防災研究センター センター長

－4研究発表1：ちょこっとサポーターから比角スマイルプロジェクト（新潟県柏崎市立比角小学校PTA）

2：コロナ禍だからこそでできる全生徒に寄り添った活動を（静岡県浜松市立東部中学校PTA）

3：なぜ、私たちは『うんこ交通安全ドリル』を作ったのか？

～プロを巻き込んだ交通安全への取組～（神奈川県川崎市立日吉中学校PTA）

4：富士山の火災災害から子供を守るPTA活動（山梨県富士吉田市立吉田西小学校PTA）

－5クロージングアトラクション：①河口浅間神社 稚児の舞、②一般社団法人 星つむぎの村

2) 全体会

－1次第：①オープニングアトラクション→②開会式→③記念講演→④閉会式

－2オープニングアトラクション：甲斐◇風林火山（演舞）

－3記念講演（演題）：「私の科学と社会貢献」

講師：大村 智（おおむらさとし）氏（山梨県韮崎市出身）

※2015年ノーベル医学・生理学賞を受賞『線虫感染症の新しい治療法の発見』

イベルメクチンを発見・開発したことで有名な理学博士

3. 所感

－ 1分科会

☆オープニングアトラクションの富士学苑高校・ジャズバンド部の演奏は、凄く良かったです。

演奏の技術とかは自分には分からないが、ジャズが好きというハートの部分は十分に伝わってきました。

若いからということには関係なく、好きなモノに打ち込める姿は素晴らしいと改めて感じました。

☆講演は、NHKに出演（ブラタモリ）でお見かけしたことがある、吉本 充宏 氏が講師でした。

- ・東日本大震災では、『釜石の奇跡』と『大川小学校の悲劇』という事例が有名ですが、それらを題材にお話しされました。
- ・どちらの場合も、想定された津波浸水区域を大幅に超えた津波が押し寄せてきましたが、前者は防災教育を8年間続けた結果、現場の適切な判断により、より山側へ避難し、99.8%の命が守られました。
- ・後者は先生の判断等で通常の避難所までしか避難せず、残念ながら7割の命が失われてしまいました。
- ・引率した先生等を責める訳ではないが、学校長等には『防災』の知識・技能が必要なのは、自明の理です。釜石では、災害の伝承やハザードマップ等をしっかりと理解していたことが、好結果に繋がったのです。
- ・ハザードマップは、想定（色付け）されなかった範囲を示して安心するモノではなく、想定以上の結果となることも憂慮しておくことが重要で、様々なデータから事象の可能性や最大の範囲を示しているだけ。
- ・津波や風水害等は、防波堤や堤防を構築すれば防げる可能性もあるが、火山災害は基本的に防げない。
- ・1945年～2020年までで噴火による死者数は230名となっているが、有名な雲仙普賢岳・御嶽山の噴火の際でも分かっていることが、死者の大多数が当初避難をせずにカメラ等で撮影していたことが、残された携帯電話やカメラ等で判明している。
- ・国内における自然災害は、知識×経験×意識で回避できる場合もあるが、火山災害（噴火）は、回避は出来ない（噴石等をヘルメットで守ることで被害を軽減させる可能性はあるが、逃げる以外に手はない）。
- ・富士山は、いつ噴火してもおかしくない。噴火する箇所（火口）も山の頂上とは限らない。
- ・ハザードマップを見ると、想定される火口から山肌を滑る形で溶岩流等が流れる可能性を示している。但し、溶岩は人間が歩くスピードと同程度なので、逃げる方向さえ間違わなければ、逃げられる。
- ・避難所は、風水害と異なる場合もあるので、注意が必要。必ず逃げる意識を持つことが重要である。いざという時に備えていても、実際に行動に移す意識を持ち、訓練等をしてなかったら助からない。
- ・東海地震等を念頭に富士市でも小中学校等で地震避難訓練や引き取り訓練が実施されていますが、富士山の噴火に備えた避難訓練が実施されたことは、聞いたことがない。
- ・私自身、昨年度改定された富士山ハザードマップは見たことがあるが、自宅付近に溶岩が来るのか、時間的な猶予があるのか等をしっかりと確認してはいない。
- ・PTAとして、子どもの安全・安心をより高いレベルにするために、学校側とも協力して有事の際に備えるように提案・要望し、ぜひとも協力したいと思いました。

☆研究発表1では、通常の活動ができないどころか、保護者が簡単に学校に入れない・集まらない状況で、どうすれば学校の役に立てるかを検討し、できることをできる時間に手伝う『ちょこっとサポーター』や行事の際の保護者の健康観察や誘導、消毒等を、今でこそ当たり前の行動を率先してPTAで担ったそうです。

- ・学校や地域に頼るだけではなく、できることがあることを実感した2年間だったようです。
- ・その後、令和4年度からは、PTA有志を中心に【比角スマイルプロジェクト】を立ち上げ、地域の中で継続して取り組める事業として運営を行っているとのこと。
- ・その内容は、子どもの居場所づくり・学習支援・地域食堂・子育て支援・吹奏楽部の技術指導支援等、PTAの枠を大きく飛び出した活動となっています。
- ・今後の展開として、不登校の親子支援・ひとり親家庭の支援等も計画しているそうで、コロナ禍だから、通常の学校行事を制限しているから等という理由でPTA活動を中止するのではなく、積極的にPTA活動を実践した単Pのパワーに感服するとともに、見習うべきところはぜひ見習いたいと思いました。

☆研究発表2は、コロナ禍によりPTA活動が停滞したが代替案を模索し、2つの活動を進めたという紹介で、1つ目は「東中スマイリーTシャツ」の制作で、新型コロナ感染防止対策に加え、当時の学校ではエアコンの設置が完了していなかったため、熱中症等の身体への影響を考慮して、涼しいドライ素材のTシャツをPTAと同窓会が連携し、全校生徒600名に贈呈したとのこと。そのTシャツには、スマイリーマークを入れたうえで、『あなたは笑顔がよく似合う!』という意味の英文のメッセージも入れたそうです。

- ・富士市でも、コロナ禍の感染予防の観点から、登下校時の制服着用義務の撤廃（ジャージ登校可）やエアコン設置を早めていただいたり、消毒・抗菌対策を企業や団体等がサポート等もしていただいています。また、学校運営協議会やCS（コミュニティスクール）構想も推し進めています。
- ・何を言いたいかというと、この発表のTシャツの費用は、同窓会が全額負担してもらっています。それは、PTAと同窓会が上手く連携していなければ、けっして負担してもらえません。
- ・富士市での学校運営協議会やCSでは、PTAは主要な団体の1つではありますが、PTAと他団体の連携がなければ、全生徒（児童）に寄り添った活動に支障が出てしまいます。PTA活動を他団体の方々も見ています。そのうえで、学校のため・生徒（児童）のため、そして、PTA役員も頑張っているな～という姿勢を見せることで、それらの団体等から、さまざまなサポートをいただけると考えています。
- ・学校運営協議会やCSがこれから発展していけるように、市P連としては単Pへの支援等はもちろん、私自身としてもPTA活動への取り組みも、より考えて・頑張っていきたいと思います。
- ・2つめは、「東中デジタル防災MAPづくり」で、校区の防災上の危険個所を地図に落とししていく。という従来の活動をデジタル化したモノです。そのツールとして『静岡県防災アプリ』を活用したそうです。
- ・このアプリには、災害時の情報をタイムリーに通知・避難所の位置やハザードマップ・避難トレーニング等の機能がすでに盛り込んであるため、身の回りの危険個所等を認識し追記することで、防災意識を高めること。地域の課題解決への具体的な行動を起こすためのきっかけとなったそうです。
- ・私は、富士市消防団の一員でもあるので、災害図上訓練（DIG）は実践したことがあります。それらを中学生レベルまで取り込んで出来たら…静岡県防災アプリを活用することによって、誰にでもリアルタイムで、危険個所の把握・問題点等はスピード感をもって対処出来るようになったら、PTA活動の枠を超えた地域の貴重なデジタル資料となると思います。実現できるかは分かりませんが、まずは自分の地域から考えていきます。

☆研究発表3は、『うんこ交通安全ドリル』なるモノについてでした。正直、この時まで『うんこ漢字ドリル』は知っていましたが、『うんこ交通安全ドリル』は知りませんでした。

- ・『うんこ漢字ドリル』の文響社さんとの出会いは、当時のPTA会長の友人が転職により文響社へ入社し、雑談の中から生まれたそうで、交通安全に関して自分たちだけで取り組むことに限界を感じていたPTAと、社会貢献と保護者との協業を希望していた文響社さんとで生まれたコラボレーションです。
- ・作成秘話として、実際に作成するにあたって本物の大型トラックからの死角を把握したり、実際の道路の危険個所からクイズ問題を作成したりと、協業が上手く出来ているところが良かったです。
- ・文響社さん以外でも、大型トラックは元PTA会長さんの勤務先から、同地区小学校PTAとの協力、PTAと企業のコラボに興味を示した日本テレビの密着取材、地元の大企業と新たなコラボ等、外部の力を大いに活かした事例で、いろいろな方々を巻き込み力が半端ないです。
- ・啓発ドリルとしての第一弾として発刊し、起点・発想はPTAからのいうことでさまざまなメディアでも紹介され、最終的にはトヨタモビリティ基金により、250万部以上が小中学校等に無償配布されています。
- ・企業は社会貢献等でコラボしたいが、どうすればいいのか分からないのが実情です。富士市にも、PTAや学校とコラボするような企業との橋渡しをお願いしたいと感じました。
- ・富士市の子どもたちにも、交通安全の啓発本を無料配布していただけるように、関係団体と相談して進めていきたいと思います。

- ☆研究発表4は、富士山の火山災害から子どもを守るPTA活動としての取り組みの紹介で、講演（演題）に近く、どのように火山防災にも取り組んだのかを、自分たちでも真似できるように伺えました。
- ・令和3年3月に富士山ハザードマップが改定され、火山防災についても転機となりました。
 - ・そのハザードマップでは、発表校の富士吉田市立吉田西小学校から一番近い位置で噴火した場合、最短で2時間で溶岩流が到達してしまうと予測されているようで、また今回の改定により火山噴火の際の避難方法は『原則徒歩による避難行動』を行なうことが示されているそうです。
 - ・今年度は従来の避難訓練に加え、富士山噴火の際の徒歩による避難訓練と保護者との引き取り訓練を、学校が企画し、PTA活動の一環として保護者としてはもちろん、交通安全や救護等の安心サポーターとして参加したそうで、富士市のほとんどは短時間で溶岩流がくる想定ではありませんが、ぜひとも火山防災教育と避難訓練を行なう環境等を提供したいと思います。
- ☆クロージングアトラクションの1つ目は、河口浅間神社の例大祭でも活躍する地元小学生の稚児の舞でした。現在では国の重要無形民俗文化財に指定されており、伝統を受け継いだ神楽でした。御幣（ごへい）の舞・扇の舞・剣（つるぎ）の舞は、厳かな面もありつつ心が和む時間でもありました。
- ・2つ目は、一般社団法人 星つむぎの村（山梨県北杜市）でした。私は、この団体は存じ上げなかったのですが、星つむぎの村の星空ナビゲーターが、私たちに直接語りかける出張プラネタリウムでした。
 - ・地上を離れて宇宙へ出かけ、地球を眺めて太陽系の惑星をめぐり、さらに銀河系、宇宙の果てへ。自分たちの存在がちっぽけなモノとを感じる反面、奇跡も感じられる時間でした。
 - ・分科会は、トータル5時間15分という予定よりも1時間30分以上も楽しい時間を過ごさせていただき、市P連としても単Pとしても、取り入れたいことが盛りだくさんの講演や研究発表ばかりでした。
 - ・別の分科会でも有意義な研究発表もあったので、それらも含めて市P連内でもお伝えしたいと思います。

ー2 全体会

- ☆まずは、河口湖ステラシアターという古代ローマ劇場をイメージしたデザインが面白く、また屋外ステージとして屋根が開放出来る点が興味深かったです、
- ☆オープニングアトラクションのステージは、迫力がダイレクトに伝わり、演舞として完成されたパフォーマンスは圧巻でした。30名以上のパフォーマーの糸乱れぬ動き・キレも良く、それでいて力強く。と、地域の大人が地域の子どもたちへと伝え・新しいモノを創っていくことも伝わり、まさにCS（コミュニティスクール）を体現しているようでした。
- ☆記念講演は、大村博士の幼少期から話が始まりました。現在の山梨県韮崎市出身で、祖父（神主の傍ら村長・郡長等を歴任）、祖母（小学校2年間のみ通っただけだが、記憶力は良い）、父（農業・地元の名士）、母（学校の先生）という環境で育ったそうです。基本的に、祖母のお世話になることが多く、考え方は明治時代寄り、また『人のためになることをしなさい』と言われて育ったそうです。
- ・父には嫉妬や羨むことはするな。母には情緒を養うように躰けられたとのこと。
 - ・生家は、地域を代表する養蚕農家の伝統を受け継ぐ建物としての価値が認められ、韮崎市初の有形文化財へ登録された後に大村博士から市に寄贈され、建築当時の状態を残しつつ、解体修理・復元を進めて現在に至っています。
 - ・ご家族の歴史を紐解くと、父は初代PTA会長であったり、教育にも熱心ではあったが、『子どもは言う通りにはならないが、親のする通りになる』と“親の背中を見て育つ”という考えの持ち主で、農業に対する技術等を徹底的に教え込まれた。当時は機械化されておらず、牛で田畑を耕したり手や足で回して農機具を操作したりと、いろいろと教えて込まれて、農業を継ぐ予定だったそうです。
 - ・中学・高校・大学と学業をあまり優先せずに、サッカーや卓球、スキーに打ち込んだとのこと。
 - ・大村博士は、中学校・高校・大学と優秀な先生や仲間（ライバル）に恵まれたそうです。高校では自分たちで勉強・研究し、教わるだけではないと学んだそうで、そこでの経験も今の自分の有り方

に繋がっているようですが、高校3年生の時に将来を左右する転機が訪れます。

- ・それは、盲腸でしばらく入院したそうで、そんなある日、父から「大学に行くなら行かせてあげる」と言われ、そこから大学という存在を調べ、大学へ行くことになるのですが、そこで2人の先生に出会うわけです。
- ・1人は、実験が好きになるきっかけになった先生で、いつでも実験が出来る環境を作ってくれた。
- ・もう1人は、地質調査で引っ張りまわされたが、研究するという楽しさを教えてくれた。
- ・そんな大村青年は、教員資格を取得し卒業後には都立の定時制高校で教員となるわけですが、その傍らで大学院修士課程で学び、研究者としての道を歩んでいきます。その際に恩師からの「大学がどこか、何をしたかは大したことではない。大学を出て5年間で大事」との教えの通り、その後就職した北里研究所で物質研究を始めた際は、実験だけは誰にも負けないと打ち込んだ5年がのちにつながったと強調されました。
- ・他の研究者よりも遅れていたが「取り戻そうと誰よりも早く行き、夜遅くまで実験に励んだ」と振り返り、そのような経験を通じ「成果を上げるには優秀な人ばかり集めれば良いと考えがちだが、やる気のある人間を集め一生懸命やる方がいい仕事ができる。これは私の信念」とも仰られてました。
- ・それには、私も同感です。仕事でもPTA等でも、優秀で何でも出来る方はいますが、やる気がなかったり、イヤイヤやっている方はどうなんだろう？と思います。共働きでいろいろと大変なのは分かりますが、PTA活動は、子どもに【自分たち（子ども）のために、大人たちが一生懸命にいろいろな活動をしている。】という背中を見せることで、感謝だったり、学校・地域等への社会貢献を考えさせる場とも考えます。
- ・教師の資格は、進歩していることだ。教えるということは、共に希望と夢を語ることだ。という想いもあり、人材育成にも力を入れています。セミナーを延べ500回以上開催し、そのうち178回は海外から研究者を招いてるそうです。結果、先生の元には優秀な研究者（博士）が多く育っているとのことでした。
- ・「実践躬行（じっせんきゅうこう）」等の言葉を示し、真似でなく自分で考えた独自のもので取り組まないで飛び抜けた成果は得られない。とあえて泥をかぶる仕事に費やすようになっていったそうです。
- ・その後、留学や企業との共同研究（米・メルク社）やイベルメクチンの発見・開発と大きな成果を上げていきます。特にイベルメクチンは、オンコセルカ症、リンパ系フィラリア症の他、糞線虫症、疥癬の予防・治療薬などとして年間5億人余に無償供与していると説明があり、大村博士の研究による国際貢献へのスケールの大きさを感じさせるものでした。
- ・余談ですが、新型コロナウイルスに対するイベルメクチンの有効性は、インドでは認識（統計上）されており、実際に投与した地域と投与してない地域との感染者数・死者数には乖離があるので、有効性があるとのことでした。私は医療従事者ではなく、その知識を有してないので、誰か教えていただきたいです。
- ・それらの特許料等で、北里大学メディカルセンター等を建設し、社会貢献にもご尽力をいただいています
- ・また、「百折不撓（ひゃくせつふとう）」「一期一会」が人生において重要だということも仰ってました。
- ・今回の講演は、1時間20分程度の講演時間で駆け足気味となりましたが、有意義な時間となりました。今後の人生の目標としては大きすぎる存在なので1/2500スケールを目標に、具体的には富士市立小中学校の子ども約20,000名に対する社会貢献から始めたいと思います。
- ・来年度の関東ブロック研究大会は千葉大会です。富士市PTA連絡協議会としても、研究発表に負けずに、取り組んできたいと強く思いました。

以上